

自由に参加してください！

第2回大学院外国語学研究科主催講演会

日時： 2012年1月16日(月)16:40-18:10

場所： 1号館7階小ホール(R171)

講師： 新宮一成 氏

京都大学大学院人間環境学研究科教授

**演題： フロイト夢解釈理論の内部構造
— 嘲笑の連動を中心として —**

講師紹介：

昭和25年大阪生まれ、京都大学教授（大学院人間・環境学研究科）。

1975年京都大学医学部卒業。精神医学専攻。大津赤十字病院医師（精神神経科）、京都南通信病院医師（健康管理科）、京都大学助手（保健診療所）、フランス政府給費留学生（パリ第七大学）、京都大学助教授（教養部）などを経て、1999年より現職。1998年日本病跡学会学会賞(正賞)、2000年サントリー学芸賞（歴史・思想部門）受賞。日本病跡学会、日本描画テスト・描画療法学会、日本精神医学史学会、日本芸術療法学会各理事。著書に、『夢と構造』（弘文堂、1988年）、『ラカンの精神分析』（講談社現代新書、1995年）、『無意識の組曲—精神分析的夢幻論—』（岩波書店、1997年）、『夢分析』（岩波新書、2000年）、*Being Irrational: Lacan, the Objet a, and the Golden Mean.*（Michael Radich 訳、学樹書院、2004年）など。

講演内容：

フロイトの夢理論は、人間の人間による認識にとって、一つの転回点を示していました。「象徴」という概念の用い方にそれがよく現れています。フロイトの前まで、「象徴」は、神の側に残されている「知」として思念されていました。つまり「象徴」は、神が人間に、本来は神のみの「知」を、伝達する働きとして感じられていたのです。フロイトはそうした時代に生をうけ、主体的な「知」の装置である理性が、自己を「知る」ことに挫折する必然性を、「無意識」と名付けました。ではフロイトもやはり「象徴」という場所において、「無意識」が神からの「知」を伝えていると考えたのでしょうか？ 夢解釈の際に具体的に問題になる「誰がいつ、何を知っているのか」という問題を、「象徴」による「知」をめぐる精神史として考えていきます。

**【問合せ先】
教務部分室**